

有職裂、にみるパターンのデザイン的一考察

— 工芸史における日本の文様の項より —

A Study of patterns in "Yusokugire"

— In the History of the Japanese Patterns of Craft —

佐 藤 武 郎

参考

織物は経糸と緯糸の組合せで出来ており、この組合せを組織と云う。

経糸の上に緯糸が出る場合と、緯糸の上に経糸が出る場合の組合せに過ぎない。

有職裂は、生地^{あやおり}に模様^{しやもん}の織り出されたものであり、これを織の上では「綾織」または「斜文織」とも云う。三本以上の経糸が組合って組織され、その組織点^{しやもん}が斜めに連続して、織の表面に斜の畝が出来る。綾は組織の上からは、経糸で斜文を表現したものを経綾または経斜文、緯糸で斜文を表現したものは緯綾または緯斜文と云う。普通一色で織られており、織り上ったものを後染にする場合もある。

平安時代の後期は、奈良時代のような唐文化の全面的模倣から離脱して、我国独特の美意識に目覚め、よくそれを消化した時期だとされているが、生活を中心としたデザイン分野の中に、その日本のかたちの素形を求めるならば、当然今日におけるパターンデザインの基幹的存在である有職裂を、そのうちの一つに、挙げる事が出来るよう。

当時は有職裂は、神職に奉仕する者や、皇室関係の間にあって、極めてわづか、製作されたに過ぎない性質の物であったが、それだけに、有職裂にみるあの洗練された美しい一連のパターンの数々は、その内容自身、造形的に、また技術的にも、我国最高の水準を示すものとして受けとめて好いであろう。それは現在もなお、依然として日本文様の基調的存在としての評価を失わずに、新鮮さを残しているからに他ならない。

パターンデザインの立場から、有職裂を考察した場合、総体的にそのパターンの構成要素である、レピート repeat としての視覚的訴求効果が、多角的に完璧なまでの追求のされ方をしていることである。プロポーション

proportion (即ち、物の形における各々の部分。あるいは、部分と全体との比例の関係)において、均整差を完全なものとするための、デザイン上の計画が周到であったことを意味するものである。それは言葉をかえせば、レピートの基本形となる単位形の集合的秩序を保たせるために、綿密なデザインの計画の上に立って、原図としてのパターンの選択を繰返えし、決定的なパターンにもち込んだと考えて好いであろう。その結果として、選択された一連のパターンの数々は、共通的に、同一単位形を基調として、構成に変化と統一を与え、常に新鮮さをかもす、格調高く上品な、有職裂としての機能を、充たすに足るバリエーションが、創造されたとみるべきであろう。しかもそれは、有職裂が繊維としての用途と機能につながる、綾・織の組織上の制約条件をふまえてのパターンであってみれば、当時の人々の造形感覚の鋭敏さと、周到なデザイン計画の進め方は、驚異的なものさえ感じる。また当然その時代的關係から、中国的パターンの要素が、そのまま移行されたと考えられるものが、パターンデザインの根底にあったのは明瞭であるが、その場合においても、有職裂のパターンの選定は、実に上手に冷静なまでの態度で、日本のかたちとしての感覚で受け入れ、よくそれを日本のパターンデザインとして整理し、きわめて自然に表現させ得ている点は驚ろくべきことである。

パターンにおける構成手法の点から考察をすすめてみると、単位形の適切な割付(構成配置)法を基本として重視し、そこにみるパターンとしての、厳しいまでの秩序と変化と表現の方法における巧妙さ、静的な中に流動性をもたせた、視覚的表現の見事さ等、つねに基本的な割付法を用いての、安定性の中に、単位形のモチーフによる、パターンとしての変化をねらい、漸新さを表現しきっている点に、日本のかたちに対する、優れた造形感覚を認めない訳にはいかない。

割付による表現は当然、幾何学的規則による構成が主体であり、変化にとむ単位形の集合美のまとめ方は、今日繊維デザイン分野に共通なものとして見直す内容のものである。それは有職裂にみる、パターンの割付手法の巧妙さや、プロポーションの適確性、また繰返えしのリズムによる美的訴求効果の卓越した優秀さを識ることであり、それと同時に、より重要な事柄は、デザイン上、平凡な単位形の割付と云う手法によりながら、素直に美しさを表現し得ている造形上の感覚的非凡さを再認識することであろう。さらに言葉を加えるならば、有職裂のためのパターンの必然性は、衣服に仕立てた後のことを計算に入れて計画されていることであり、その場合のパターンが決して逆さになり得ないように、パターンの設定がなされていることである。それは後世にはみられない内容の事柄であり、注目に値すべきことであろう。ここにも細やかな神経と計画性のあったことを認めねばならない。

伝統的日本のかたちについては、これまでも一般的特色として、静的な視覚性をもつ傾向のものが多く指摘されてきたが、その傾向の一つとして、素材の選択とその扱いの点で、たとえ躍動的表現を意図したと受けとれる場合でも、それはそれなりに静的な激しさが認められ、穏やかさや、丁寧さがそこに感じられ、それが日本的造形表現の特質だと云う見方がある、

有職裂にみるパターンは、平安の後期に、他の日本的造形と同様な点で、その成熟をみる事が出来るが、その場合においても、パターンの殆んどが時代的嗜好性を含めて、幾何学的線による表現の扱いが主体となっており、その線のあり方自身が、日本的造形感覚による特色とされている丸味をもっている点であることや、直線的な感覚による丸味のある構成から成立している点が共通的内容として触れることになるであろう。日本のかたちとしての簡潔で暢びやかな線の美しさは、平安期にみるカナ文字と同質の内容をもつものと云えよう。

それにひきかえ、中国のパターンの表現形式は、その傾向として一般にあげられるものに、不均整に近い、むしろ自由弄放な構成要素が主体とされているが、日本においては、幾何学的な線による構成要素がその本質とな

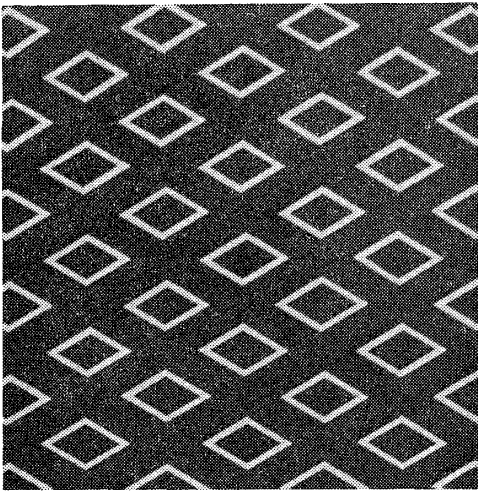
る。

有職裂にみる一連のパターンは、正にその好例であり、幾何学的線表現を駆使し、それを基本的思考に立って直線・曲線・斜線・十字線・亀甲線・円的な線・楕円、それに植物的単位形の集合を企画の中心としている点等、それは現代の眼でみた伝統的デザインの基幹としての発想と展開と定着を試みたことを意味するものであり、現代の繊維デザインにつうじるパターンデザインとしての構成的美しさを認識する上で、参考にすべき事柄であろう。繊維デザインにおける流行的現象の中で、これまで時代的に輝やかしい優れた数々のパターンが、古典的な復活現象の名において、構成的変遷はあったにしても、たえず見直され、繰返えされてきているが、その中でも殊に有職裂のパターンは、そのデザインの計画性と、それに伴う構成の美しさの点で、増々その輝きを増し、決して見失われることはないであろう。それにしても、先人達のデザインに対する美意識の高度さと、徹底した計画性と創作態度を見直すべきである。

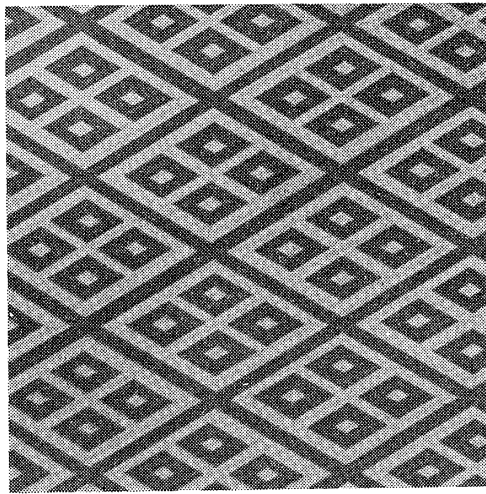
参 考 文 献

- | | |
|---------------------|-------------|
| 裂 | 福守 賀一 |
| 平安のみけし | 江馬 務・宇都宮誠太郎 |
| 視覚デザインの原理 | 高橋 正人 |
| 日本衣服史 | 永島 信子 |
| きもの読本（染と織） | 本吉春三郎 |
| 日本美術工芸史 | 藤原 義一 |
| 日本美術辞典 | 野間 清六・谷 信一 |
| 日本のデザイン・モチーフ | 棚橋 一晃 |
| 日本美術史 | 吉沢 忠 |
| 世界美術図典 | 講 談 社 |
| 造形教育大事典 | 不昧堂書店 |
| 日本のきもの | 龍村 謙 |
| 日本の工芸（織）7 | 淡 交 社 |
| DSS-2-クリエイティブパターン | 清水 要 |
| 日本の文様 1. 2. 3. 4. 7 | 光 琳 社 |
| 日本の染織 | 守田 公夫 |
| 服装と故実 | 鈴木 敬三 |
| 色彩の美学 | 塚田 敢 |

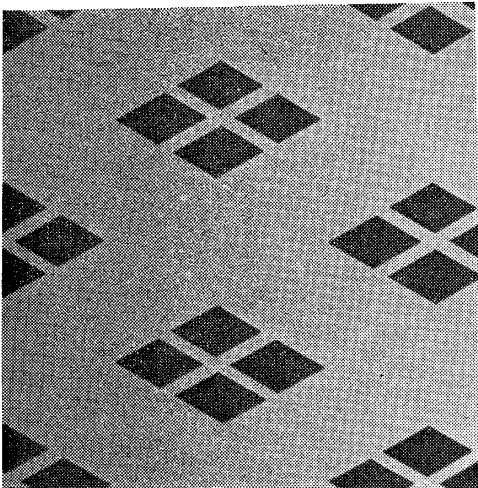
1



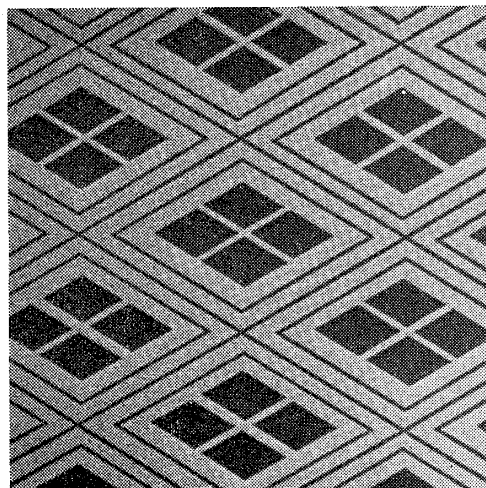
4



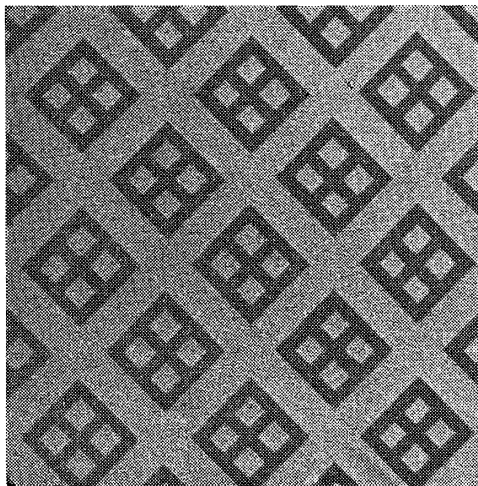
2



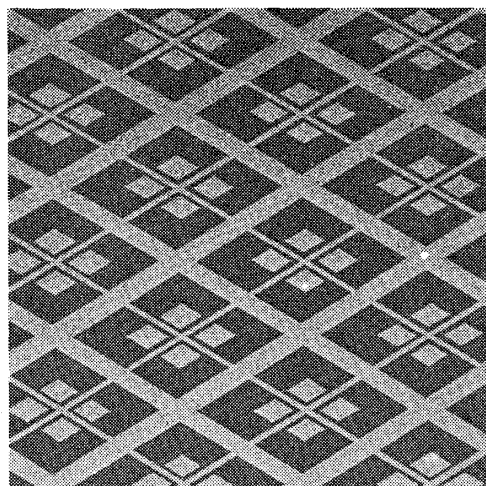
5



3



6



解説

菱紋様は斜線の交叉によって生ずる菱形の輪廓をとって単位形としたもの。

図1～6は菱の単位形によるパリエーションの一端を示めたもの。菱形の単純な単位形の配例も、一ケの菱形を四分分割し、みかたによっては四ケの菱形を集合させたかのように感じさせる細やかな内容をもつ非凡なパターンの展開がうかがわれ、優美さと厳しさの調和がみられる。菱文様は、奈良時代すでにその素形をみたが、平安後期には種々の変化をみせながら広く用いられたもの。

幾何学的な単位形としての菱紋も充分展開の後には、自然な植物を明確に連想させる日本の優美な花柄えと定着していく。